

現代的教育ニーズ支援プログラム「バリアフリーによる双方向スポーツ教育活動」
シンポジウム「双方向スポーツ教育活動とオリンピック」を開催して

スポーツ教育センター 鈴木久雄

現代 GP「バリアフリーによる双方向スポーツ教育活動」が平成 17 年度に採択され、本年が最終年を迎え、総括としてのシンポジウムを開催した。また、本年は北京オリンピックおよびパラリンピック開催の年であり、岡山大学の学生および卒業生が計 4 名出場し、大いに盛り上がった年であった。今回は、これらの出場者を一同に会し、シンポジウムを開催することができた。このようなことから、広く現代 GP および岡山大学を知ってもらうことも含め、一般の市民も参加してもらう公開のシンポジウムとした。

現代GP「バリアフリーによる双方向スポーツ教育活動」
岡山大学スポーツ教育センター シンポジウム

双方向スポーツ教育活動と オリンピック

参加無料

日時：平成20年10月27日（月）
17:40-20:00

場所：岡山大学
創立五十周年記念館多目的ホール
(岡山市津島中1-1-1)

◆基調講演
講師 鈴木久雄(スポーツ教育センター)
「スポーツ教育センターの歩みと今後-オリンピック選手への支援-」

◆シンポジウム
座長 平田昌生(岡山大学病院総合リハビリテーション部・スポーツセンター)
山口美空(天満屋女子陸上競技部コーチ・バレーボールのマガキ位入賞)
陸上競技
小林花梨子(岡山大学・学生アスリートユニオン)
マウンテンバイク
片山 梨絵(岡山大学東北・スノーボード)
スキー
小林 晋(岡山大学学生・岡山県選)
柔道・空手
松永 仁志(岡山県立陸上競技場)
柔道審判
藤田 孝人(岡山大学教育実践院・運動部)

お問い合わせ：岡山大学スポーツ教育センター ☎(086) 251-7111

本シンポジウムを開催するにあたり、スポーツ教育センタースタッフおよび岡山大学学生が話し合い協働で企画開催した。会場は、約 300 名の参加があり、大いに盛り上がった。



開会のあいさつ 佐藤豊信センター長

シンポジウムポスター



基調講演：鈴木久雄教授
(スポーツ教育センター
スポーツ教育部門長)



基調講演：現代 GP 企画・スポーツ活動の単位化授業とその成果

シンポジウムに先立ち、スポーツ教育センタースポーツ教育部門長・鈴木久雄教授より「スポーツ教育センターの歩みと今後—オリンピック選手への支援—」と題して基調講演を行った。内容は、現代 GP の理念、双方向によるスポーツ教育活動の中心課題である「スポーツ活動の単位化」、具体的な単位化授業であるスポーツ実習の実態とその成果、その他のスポーツ教育センターの事業等について説明した。また、現代 GP の採択期間中に、小林祐梨子さんが岡山大学マツチングプログラムコース (MP コース) に入学し、MP コースと連携した取り組みについても紹介した。小林さんは同級生などの学生ばかりでなく、教職員にも大いに刺激となった。さらに、オリンピック選手への支援と同時に、パラリンピック選手への支援についても紹介された。



車いす陸上競技の練習支援

これらはいずれも双方向で行われており、はじめは支援していると思っていた側が勇気づけられ、よい学びの場となった。



座長：千田益生先生、山口衛里さん

次に、シンポジウムは座長に岡山大学病院総合リハビリテーション部准教授の千田益生先生 (スポーツ教育センタースポーツ医学部門長) と、天満屋女子陸上競技部コーチの山口衛里さん (シドニーオリンピック女子マラソン 7 位入賞) に担当していただいた。千田先生は昨年 MP コースの小林さんが故障した際に、診察・指導を行ったスポーツドクターでもある。



小林 晋さん 松永仁志さん 瀬田幸人先生

シンポジスト：片山梨絵さん (左)、小林祐梨子さん (右)

シンポジストは、岡山大学 MP コース 2 年生で北京オリンピック陸上競技に出場した小林祐梨子さん、岡山大学理学部および自然科学研究科修了生・スペシャライズド所属で自転車競技 (マウンテンバイク) の片山梨絵さん、岡山大学理学部卒業生・岡山県警察本部所属で射撃の小林晋さん、北京パラリンピック陸上選手の松永仁志さん、岡山大学教育学研究科准教授でオリンピック卓球審判員の瀬田幸人先生の 5 名である。

シンポジウムではシンポジストの簡単な紹介後、各選手のオリンピック出場が決まるまでの競技生活や、トレーニング方法、審判員に選ばれるまでの経緯などを話された。オリンピックに向けて大切にしたこととして、ほとんどのシンポジストが本番を想定した練習を心がけ、メンタル面での充実を大切にしていた。オリンピック期間中のエピソードとして、陸上の小林さんは選手村において陸上のボルト選手と話したこと、サッカーのロナウジーニョ選手と写真を撮ったことなどに加え、陸上 5000m で優勝したディババ選手と練習環境などを話しあいながら、日本と海外の選手の生活環境やスポーツへの取り組みの違いを痛感し、このオリンピックの出場経験が成長させてくれたと述べた。

片山さんには、学生時代に所属していたサイクリング部の学生から「自転車の選択方法や制限」など、専門的な質問も出されたが、片山さんは市販の自転車をベースに身体に合わせたパーツを使う程度で使用しているとのことであった。射撃の小林さんは射撃という競技は集中力が必要といわれるが、自分自身では集中力が高いとは思っていないと答えた。例えば、試合中に隣の競技者が何をしているかなど見るな、考えるなどといわれるが、それは見えてしまうでもあるので、そのことによって動揺するのではなく、冷静に自分のペースを保てるようにする、ということであった。松永さんは障害者スポーツに関して、日本はかなり遅れており、スポーツ環境の充実を望むことを訴えていきたいと同時に選手として今後も活躍することが障害者スポーツの発展につながると述べた。瀬田先生は国際審判としてのトレーニング方法や資格取得への道筋、審判として度量などについて、熱く語っていただいた。

その他、フロアの学生からは、競技のモチベーションの持ち方やスランプや不安の克服方法など数多くの質問があり、参加者の関心の度合いがはかられた。現役の大学生である小林祐梨子さんには、「学業と競技の両立はどうしていますか？」など大学生にとって身近な質問もあった。新幹線通学している小林さんは移動時間をうまく利用するように心がけていることを話された。また、ユニークな質問としては、応援団所属の学生から「どんな応援をされたらうれしいですか？」など全く視点が違う質問があり、シンポジストが回答に困る場面もあり、学生の様々な考えや疑問点が垣間見えた瞬間であった。

約2時間のシンポジウム質疑応答の後、学生よりシンポジストに花束贈呈があった。座長は双方向スポーツ教育活動について意見を交わす予定であったが、会場からの質問が多く出されたため、次のオリンピック大会にも岡大生が出場できるように盛り上げていきましょうと締めくくった。

今回のシンポジウム開催により、オリンピックおよびパラリンピック出場者から直に話が聞けるというまたとない機会を経験し、学生、教職員はじめ多くの参加者が感銘を受け、今後のスポーツおよび人生における糧のひとつになったのではないかと考える。和やかな雰囲気と活気と、余韻の残るシンポジウムであった。



謝辞 シンポジストのみなさん、貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。次回のオリンピック出場と今後の活躍を祈念しています。